

1994年7月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可  
毎月1回15日発行  
定価／150円  
年間購読料／2,000円（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク  
**Green Earth Network**

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル（〒552）  
Tel. 06-583-1719 Fax. 06-583-1739  
郵便振替 00940-2-128465（大阪4-128465）  
COM21 通巻322号 発行/COM企画室

# 緑の地球 **GREEN EARTH**

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ソロブチミスト訪中団報告 ..... P 2
- ヒマラヤ緑化トライ！ ..... P 4



植えたばかりのリンゴ苗に水を運ぶ（靈丘県下寨北小学校付属果樹園）

1994・7

**28**

国際ソロプチミスト奈良4クラブによる

## 黄土高原緑化協力訪中団の報告

団長 安田順恵（国際ソロプチミスト奈良）

「ソロプチミスト」とはラテン語の合成語で“女性にとって最善なるもの”というような意味です。実業界で活躍する女性、専門職をもつ女性の奉仕団体で、1921年にアメリカで結成。日本では1960年に発足し350クラブ約1万2千人以上の会員に発展しました。

奈良県下でも22年前に創立して以来、現在4クラブ約170人の会員がそれぞれ活躍しています。

ソロプチミストは奉仕活動のなかで、環境問題に深い関心をよせてきました。



小学校付属果樹園にたつ記念碑。

身近な地域の環境美化緑化に長年の実績をつみかさね、海外にも目を向け、すでに中国広東省の各地にカサブランカの花を咲かせたり、中国沙漠緑化に貢献されている鳥取大学名誉教授遠山正瑛先生に千嘉代子賞（日本のソロプチミストの発展に貢献された千嘉代子女史を記念して設けられた国際交流功労者への賞）をさしあげたり、環境問題に敏感に取り組んできました。

そんな折、「緑の地球ネットワーク」の活動に共鳴し、奈良県下の4つのクラブが共同して黄土高原緑化に協力をさせていただいた次第です。単に資金をさし出すだけではなく、黄土高原への理解を深めるための講演会やパネル展などを開き、一歩一歩理解を促進してきました。

今年1月、4クラブからの50余万円の寄付金は現地の小学校の果樹園の建設費として役立ててくださいました。

誰言うとなく「現地に行ってみよう」と声があがり、「黄土高原緑化協力訪中団」が結成され、5月29日から約6日間の日程で、20人のレディの黄土高

原行が実現しました。

大阪空港から北京空港、そして郊外の南苑空港から専用のチャーター機でその日のうちにいきなり大同市へ。

飛行機の中から眺める山々はうすら緑色を呈しているだけのものすごさ。バスに乗っても荒々しい山岳地帯を乾れ河に沿った道をひた走るのみ。

翌日いよいよ渾源県荊庄郷長条村へ。村はずれのボブラ並木の道の両側には小学生たちがそれぞれカラフルな旗やカードを持って大歓迎してくれる。村人たちの顔・顔・顔。道路沿いに拡がる広大な土地はそのまま標高2300mにそびえる山なみまで、さえぎるものもなく拡がり続けている。

「ここが果樹園です。そして記念碑。これから除幕式をいたします」と大同市青年連合会副主席の祁学峰氏。

真紅の布でおおわれた記念碑と広大な果樹園を見て、ぐっと胸にこみ上げてくるものがあり、やっぱりサングラスを持ってくればよかったと。祁学峰氏と私とでその布をはずと、中から緑色の三角帽子をかぶったような碑があらわれた。中程には白地に赤い字でくっきりと「奈良国際ソロプチミスト友好園」と彫り込まれています。まさに感激の一瞬。手離して涙を流しました。みんなが感動のうれし涙に眼をうるませてよろこび合いました。

続いてこの村の小学生と一緒に記念植樹作業。みんなこの日のために、スラックスに軍手、運動靴といでたちよろしくスコップを持ってかまえます。

昨夜から水をたっぷり流して大きな穴を掘ってあるところへ1本1本植えていきます。約50cm位に成長したリンゴ樹が整然と立ち並んでいく光景に再び感激。5年後には実をむすびますからとのお話に、収穫のお手伝いに来ますわなどという人も。

この日の私たちの植樹作業はあくまでも記念事業で、一畝のみでした。け

れども、私たちが寄付した資金で買われたリンゴ苗約4000本をこの2万坪の土地に植えて下さった人びとに本当に敬意を表さずにはいられませんでした。

それから一行は果樹園から20分位歩いたところの長条村のはずれにある小学校を訪問しました。

父兄も児童も大歓迎して下さるなかを、日本から持参したボールや木琴、ピアニカ、タンバリン、カスタネット、タオル類、北京で調達したアコーディオン、書籍150冊、ノート1000冊、エンピツ1000本を贈呈いたしました。

早速持参のピアニカで日本の童謡を私たちが唄うと、中国の子供たちは、「共産党の歌」を唄って返してくれます。簡単なお遊戯をして日本のおばさんたちと中国の子供たちと一緒に交流。まことに楽しいひとときでした。

帰路は夜行列車でしたが、その後あちこち観光した私たちの一行も、日本へ帰ってみればあの渾源県での、入浴も満足にできなかった3日間の思い出



子どもたちと交流して楽しいひとときをすごした。

と、中国訪問がほとんど初めてというレディたちのカルチャーショックの大きさが、日に日に鮮明に印象深いと異口同音におっしゃいます。

かの地に身を置いてこそ真の理解が深まったように思われます。

私たちの植樹奉仕事業は、この旅行で幕を閉じたのではなく、この旅行によって幕を開き、新しい展開をするものだと確信している昨今です。ありがとうございました。



ワーキングツアー・専門家緑化調査団

## 黄土高原に出発せまる

ヤオトン宿泊に期待

毎日暑さが厳しくなるなか、中国黄土高原ワーキングツアーの出発が近づいてきました。春のWTで起工したヤオトン（窓洞）がどんな泊まり心地か、今から楽しみです。今回のWTの参加者は次の通りです（50音順、敬称略）。

植田稔子、鞍田悦子、小白方信雄、下田良二、高見邦雄、中西あかね、中野紀子、中原由美、西原淑恵、東川貴子、平川進、前川恒子、前川宏、三宅文子

以上14名

18歳から59歳までの年齢層で、女性の方が多く、特に男子学生はゼロ。成田からの出発ということで関東方面の参加者を予想していたのですが、不思議なことにみなさん関西の方です。

7月5日と20日にミーティングをもち、現地のことを事前に知り、また、なかよくなって出発したいと思ってい

ます。

各分野の専門家にも加わってもらつた調査団は、自然と親しむ会の案内役を2回づけてしていただいた立花吉茂さん（花園大学教授・大阪市立咲くやこの花館技術顧問）を団長に、メンバーが決まりました。

立花吉茂、高見邦雄、竹島照二、竹中隆、遠田宏、富樫智、橋爪新太、本野一郎、本野麻美、山田惇、山田孝子の11名です。

黄土高原の状況をいろんな立場からじっくりとみてもらい、今後の緑化協力をどのように進めたらいいか、さまざまな意見を出していただけると思います。植物を専門にされているかたが多いのですが、黄土高原は夏の2、3ヶ月の間だけ、畑の作物と草の緑におおわれます。緑化協力の前進にむけて、成果を楽しみにしてください。

## 山西省の自然

石原忠一

(92年緑化協力団団長)

### (22) シラカンバ *Betula* 属

「乾燥地帯では、斜面の向きのちがいによるデリケートな地表蒸発量のちがいが土壤水分の量に大きな影響を与えるのである。シラカンバは、まづ北向の斜面からあらわれ、次第に北斜面からあふれ出して、東→西→南の順で進出してくるのである。」

これは、1942年今西錦司の率いる『大興安嶺探検・報告書』1952、1991年朝日文庫——の中で、北緯50度の草原から、アムール河の源流のひとつガン河をさかのぼるにつれて森林があらわれる様子を、探検隊員、当時京大学生であった吉良竜夫さんが記述した文章です。

シラカンバの仲間は、風媒花で、種子も風に飛ばされ、崩壊地や山火事あとなどの裸地にいち早く林をつくります。氷河の影響をうけ、恒山北面に茂る木々に白樺が多い。南面は乾燥して木が育たない。



### '94年度助成金が決定

緑の地球ネットワークの黄土高原緑化協力にたいして、郵政省国際ボランティア貯金、環境事業団・地球環境基金の94年度の助成が決まりました。

国際ボランティア貯金の助成は、大同市の黄土高原の丘陵部分の緑化を中心には12,439,000円と、昨年の2倍以上になりました。これまで苗木代が主でしたが、94年度は整地や植えつけの労賃も助成対象になり、地元農民の負担軽減につながります。また6つの小学校に果樹園を建設できます。

地球環境基金の94年度の助成は、主に太行山脈における緑化協力にたいして、5,600,000円の助成が内定しました。昨年の当初決定にくらべ、40%増額されています。現地における緑化協力の実績が評価され、うれしく思います。助成の背後にある多くの協力者のみなさんへ感謝し、またこれらの制度の確立と強化のために、みなさんのご協力をお願いいたします。

山西省のBetula属は、4種報告され、恒山でも斜面の向きで植生がガラッと変わります。

1977年冬、旧ソ連邦文部省の招きでロシア語学者の伊集院俊隆さんと、幼児教育の現場を参観交流したとき、凍

りつく12月をせめて一番黒海寄りのモルダビアへと案内され、モスクワのキエフ駅から、どこまでも続く雪の白樺林を列車で走りつけた印象がよみがえります。武者小路実篤・志賀直哉たちが、ツルゲーネフらの描写するシラカンバの詩趣に魅了されて、『白樺』派を結集し、近代日本文学を大きく動かしていったのも、なつかしい夜明けのことでした。

# ヒマラヤ緑化ートライ！

GEN代表世話人 佐野茂樹

ネパールでは、健康で文化的な必要最低限の生活を営むには、様々なニーズを充たす必要があります。とりわけ、山村で。

医療、衛生、教育……とあらゆる分野にまたがります。自然災害から生活



村人たちの生活を守るためにかかせない蛇籠。範囲をブロックする蛇籠設置や、表土流出を防ぎ、エネルギー源を確保する緑化も欠かすことのできない一環です。

## じゃかご 蛇籠工事着手へ

ムスタン郡政府は各地の蛇籠需要に応えるため、鉄線を無償供給しています。とはいえ、需要に比してストックは少なく、申請手続きも厳しいものです。サウル村での蛇籠工事が遅れ気味なのはそのあたりの事情を反映しています。しかし今回サウル滞在中にすべての申請は完了しました。恐らく今は鉄線の供給を得、1日も早い完工をめざして奮闘中のことと思います。

必要鉄線量は4トン、労働力は25人×60日（1日あたり経費1人250ルピス）と試算されています。もし郡から供給がない場合、はるばるインドから買いつけ、搬入しなければなりません。価格は3～4ルピス/kg、運搬料も1日1kgあたり同程度です。

サウル村タマ川べりを何度も検分すればするほど、蛇籠の恩恵の大なることを痛感します。そして、カリ・ガンダキ本流沿いに適切に蛇籠が設置された時の有効利用地の拡大へと夢が広が

ります。働く人びとをサウル外に求めるなどを考慮して、前金20万ルピスを支払いました。

## 仕事場完工へ

住居兼仕事場は、完工まであと1歩です（5月末時点）。平屋ですが、セメントを用いたがっちりした造りで、私たちの入居を待っています。いや、6月には、タシさんらネパールスタッフが根城にして苗場の仕事に精を出しているにちがいません。この工事はほとんどすべてサウル村の人びとによってなされました。完工目前を確認して、経費残10万ルピスを支払いました。

## はしゅ 播種・育苗はじまる

苗場での播種・育苗が、さしあたつてもっとも大切な仕事です。旅程1ヶ月では、サウル滞在可能なのは2週間をきります。徒歩だけでも往復8日を必要とするからです。

今回は5月7日に大阪を発ち、サウル村には16日に到着。19日までは池迫、リンヂを含め5人、29日までタシ、カルマ、私の3人で苗場仕事に努めました。

ボカラで何日間かけて苗と種子を



石工さんや大工さんたちといっしょに。

調達するはずでしたが、そのゆとりがありませんでした。それで、播種は、ウティス（ハンノキ）、ゴブレ・サラ（サラとは一般に松科の木。これは英名でBlue Pineとされるもの）など3種類、ほとんどがハンノキです。しかし播種以前にうね立てをし、苗床作りをしておかねばなりません。

ナースリーは苗場南半分をほぼ整備しました。ネパール式の慣れないくわにてこずりましたが、9本のうねを作りました。苗場はごくわずかに東西に傾斜しているので南北平行に、等高線に沿ってうね立てし、崩れを防ぐために法面を運んできた石でブロックしました。ハンノキは、バラまき、条に沿った固めまき、条まきの方法各種をトライしました。乾燥を防ぐことと肥料代わりに東背面にある森林から肥沃な表土を腐葉を含めてかき集め、何度も何度も持ち運び、うね上面にたっぷりと施しました。石も沃土もドッコという竹製の背負籠で運びます。これはこれで一仕事です。

## 水やりの大切さ

最大の問題は水です。

川の流れからうまく苗場に給水することを考慮し、カトマンドゥから長大なビニール・パイプを運んできました。しかし、住居をすぐそばで建築中もあり、給水装置を作ることはできませんでした。ために、播種後の水やりは、毎朝毎夕ボリバケツや金属製水つかによる手運びです。たっぷりと水を含ませる必要があるので、これに要したエネルギーは相当のものです。夕刻、おしめり程度でも雨が降ると、救われる気持ちになります。1度だけ、早朝からシットと2時間ばかり降りました。この時は心から天に感謝したものです。

乾燥地とはいえ、本格的モンスーン入り前でもごくわずかながら



夜間の水分降下もあり、極限を想定していたことからすると、ホッとしたところがあります。いずれにせよ、モンスーンあけの水対策、そしてひきもきらぬ強風対策には万全を期さねばなりません。

仕事は朝の7時すぎから夕方4時前後、時には6時まで。合間に昼食（朝食？）をとります。もっと遅くまで働くことも不可能ではありませんが、毎日の重要なミーティングもあり、「禁欲」しました。もちろん、実質8時間の農作業だけでも十分にくたびれるものです。しかし、実に健康な疲れでした。



苗床の様子。ハンノキや、マツ、トウヒが植えられた。

## 食事と「お茶」

ポカラから発してポカラに戻る約3週間、食事は1日2回、判で押したようにダルバート・タルカリでした。野菜（タルカリ）煮付けと豆汁（ダル）、ごはん（米飯=パート）です。日本の食堂のライスの3倍ぐらいは食べたでしょう。脂肪分が少なく、ローカロリー食ですから、分量は多くとらねばやっていけません。ネパールといえば、村々の最良の食事を供されたわけで、うれしい限りです。とくにサウルでは、米がとれるわけではなく、ソバ、大麦、ジャガイモ、トウモロコシ、リンゴなどの壳剥で米・塩を買える仕組みになっていて、米そのものが貴重品であることを、よくよくわきまえたいたっています。

時に、ダルがカボチャスープに替わり、これも美味でした。肉の煮付けが出るとやはりありがたい。1月に行つた時、ダイニングキッチンの天井に干されていた山羊肉（放牧中トラに襲われ

たのこと）を、しみじみかみしめて味わいました。

早朝仕事前と仕事終わりのあとがお茶の時間です。タカリー族のサウル村はチベット仏教文化圏ですが、生活習慣の中にチベット風、ネパール風が入り交じります。チベット茶（塩辛いバターティー）、ネパール茶（しょうがなどスパイスをきかせた甘いミルクティー）を何杯も流しこみながら、ポブコーンやツアンパ（はったい粉：焙った大麦の粉）などを食べます。腹の底から力が出る、疲れがとれる、やすらぐというのが実感です。毎回、ゆで卵

1個を食べましたが、最高のぜいたくでしょう。かまどを囲んでのこのひと時は、村の人びととの自然なミーティングでもあります。言葉は少なく、思いは深く。

## 7月に最初の ヤマを越える!?

こんな風に、ささやかながら健やかに、ヒマラヤ緑化協力は発進しています。植林候補地であるダンガルジョン村、パリヤク村には、今回は行けず、今後を期する旨、タシ・ワンドゥーを派遣し、伝えました。大歓迎を受けましたが、今後の責任が重大です。両村とも3,000mを越える高地で、強風吹き荒れる乾燥地です。ここに耐える苗を育てるこもサウルでの眼目の一つです。6月にはタシが仕事を継続し、7月にカルマと佐野が合流します。発芽が順調であること、蛇籠工事が完工に向かっていること、これで最初のヤマを越えたことになります。

## サウル・日本・村おこし

サウル村全25戸から、15人の人が日本に長期滞在しているとのこと。ほとんどが出稼ぎです。これは大変な事態です。この人たちは村に戻ってくるのでしょうか。それとも「世界の都市」の中に溶けてしまうのでしょうか。そしてまた、今小学校に学ぶ21人の子供たちは、成人して村にとどまるのでし



サウル村で泊まった家の少女。

ょうか。緑化協力や治水協力は、生き生きとした村おこしと深く結びついでこそ意義があり有効性をもつことを改めて痛感しました。（6月25日記）

## 「稻村さん一家を勝手に助ける会」にご協力を！

写真右：1993年4月11日のGEN正式発足記念シンポジウムでの稻村さん。



アジア自然塾塾頭の稻村昭南さんが3月2日とも膜下出血で倒れました。稻村さんは長年ネパールで医療活動にたずさわり、緑の地球ネットワーク結成にあたっては、記念シンポジウムのパネリストの1人でした。昨年6月にはネパール緑化考察を共にしました。

2度におよぶ大手術を受けましたが4月26日退院、現在自宅療養中です。きたえあげた頑強な体力のおかげか四肢後遺症はなく、読むこと話すこと歩くことができます。ただ、しっかりした記憶力の回復に時間がかかりそうです。1日も早い全快を祈りつつ、「稻村さん一家を勝手に助ける会（責任者・竹内準さん）」への協力を訴えるものです。

稻村さん支援会費 1口 3,000円／月  
入会金 1,000円

郵便振替口座・00120-2-668629

「稻村さん一家を勝手に助ける会」  
(佐野茂樹記)

# 北海道・アイヌモシリの森林回復にむけて

講演会・準備会…

ナショナル・トラストへむけて

6月25日にアピオ大阪で、「わが父、貝澤正を語る」と題して、新井幹子さんの講演会が開かれました。故貝澤正氏は北海道、日高の二風谷で生まれ育ち、アイヌ民族の復権に生涯を捧げた方です。また、和人の侵入によって破壊されてしまった森林を回復しようと自費で山を買い、晩年には、ナショナル・トラストを提唱しました。

私たち「緑の地球ネットワーク」では、昨年の夏以来、北海道の森林の状態と緑化協力について調査するなかで、二風谷と貝澤正氏のナショナル・トラスト構想に出会いました。そして貝澤正氏のお子さんたち、貝澤耕一さん、新井幹子さん、鶴沢道子さんと出会いました。

講演では、新井さん自身の生い立ち、アイヌ民族としての気持ちの変化と、お父さんの思い出が交錯しながら、とつとつと話されました。特に、二風谷での子どものころの体験、ご自身の結婚時の逸話、お父さんが亡くなる前後とそれ以降の気持ちの変化などは、生きしく、聞くものにひしひしと訴えるものがありました。

途中で上映された、NHK札幌制作のテレビ番組のビデオでは、貝澤正氏の足跡と葬儀の様子が紹介されました。故人の高い人格と幅広い人望がしのばれました。また、二風谷の裏山の森林がみるも無残に切り払われている映像は、正氏の無念さを暗示しているようでした。妹さんの鶴沢さんも途中で駆けつけ、正氏の『アイヌわが人生』を紹介しながら、お父さんの思い出を語られました。40人近い参会者もひとりひとりが自己紹介し、質問や感想を述べあって、和気あいあいのうちに2時間半の講演会が終わりました。

散会後、新井さん、鶴沢さん、それに京都のチュプチセコルさんをまじえて8人で宝塚山本の日中友好の家に宿泊して交流しました。

26日の朝には、ナショナル・トラストの第4回準備会をもち、午後は国立民族学博物館に行き、12人でアイヌ民族関係の展示を見学しました。次は、8月の二風谷現地のワーキングツアーで再会することを約して別れました。(武田繁典)



率直な新井さんのことばに聞きいる参加者たち。

## 誠実さが伝えた

### 等身大の貝澤正像

すみだ いくこ (フリーライター)

祖父母から父へ、アイヌの血は確実に引き継がれていた。孫である新井さんには、最後までアイヌの女性として生きた祖母が織るアツシ織りの文様も、祖父が語ったときだけ話すアイヌ語の響きも、二風谷の自然とともに忘れられない。

アイヌであることを胸に刻んで生きながら、孫や子には、日本人に同化して幸せになることを望まずにはいられなかった祖父母や父母。アイヌでありながら、アイヌについて何ひとつ知らないことを、不幸とも思わず育った彼女だった。

そんな新井さんが、アイヌであるとの意味を探りだすのは、父親の残した文章を一語一語たどるなかでだった。母語を知らずに育った悔しさをバネにして、民族復権運動に立ち上がった父親が、なぜ子どもたちに母語の学習を勧めなかつたのか。あの父ですら、ある時期までアイヌ語を学ぶ必要性を感じなかつたのかもしれないと思ったとき、新井さんは、アイヌ文化の復権にかけた父の生き急いだ晩年に、彼の無

念な思いを読み取るのである。

日本文化への同化を、アイヌの幸せと思って生きた時期もあった父親の姿を率直に伝えようとする新井さんの誠実さが、私にはうらやましかった。誇張や強調もせずに、ありふれた生活語で語られれば語られるほど、そこから浮かびあがる等身大の貝澤正は非凡である。

「我々はクローズ・アップの技法をなぜ使うのか。ひとつは、ある部分をよく見せるため、もうひとつは、他の部分を見せないため」という巨匠の言葉を小栗康平さんが映画作家である自分への戒めとして伝えている。本当は見せなければならないところを隠すために、私もまた、どれほどクローズ・アップをしてきたことだろう。クローズ・アップをしない新井さんの誠実さに心が洗われる思いであった。

そして、映像が伝える二風谷周辺の森林での過剰伐採は想像以上であり、ナショナル・トラストの取り組みに一刻の猶予もないことを思い知らされた。

## 二風谷 ワーキングツアーの ご案内

富良野近くの東大演習林見学、チブサンケ(舟おろし祭)参加、そして二風谷での山林見学や交流などもりだくさんの二風谷ワーキングツアーに参加しませんか。現地集合/解散なので夏の北海道をゆっくり楽しみたい方にもお勧めします。

- 日程 8月18日(木)~23日(火)
- 集合 18日午後2時JR富良野駅前
- 解散 23日午前11時二風谷で解散
- 費用 1人5万円(現地までの交通費は別。大阪との往復で飛行機なら約7万円、フェリーなら約2万円)
- 定員・締切り 約10人・7月30日(ただし定員にたっしだい締め切ります)
- 申込み・問合せは下記まで G E N事務所 TEL. 06-583-1719

## 50年前の戦地に木をおくるおもい

椎田孝一（元書店経営）

G E N の協力地山西省は、半世紀前激戦の地でした。かつてかの地で戦った人たちにとって、緑化協力は、つぐないであり、とむらいでもありえるのではないかでしょうか。G E N の活動を報じた新聞を見て協力を申し出てくださった方々が、過日、戦友会の総会でよびかけて集めた緑化基金と使用済テレホンカードを G E N 事務所まで届けてくださいました。

私たちが緑の地球ネットワークの事業を知ったのは去る 1 月 16 日の読売新聞の記事で「中国黄土高原の砂漠化を防ごう」「コーヒー 1 杯分でカラマツ 300 本買える」のキャッチフレーズの大見出しとともに「渾源」の地名入り地図と見覚えのある段々畑の山容、それに作業中のメンバーの写真が目に焼きつきました。

今から半世紀をさかのばる 1944~45 年にかけて、要衝大同を中心に、渾源、応県、朔県を転戦したことが思い出されました。厳冬期は零下 20℃ 以下にもなり、吐く息はたちまちにして口許で霜柱になります。まづげは剛毛のようにまぶたを閉じることもかないません。行軍を終えて帰營した編上靴の中にはいつのまにか黄砂によって白い靴下が黄色に変色しています。行動は主として夜間で昼間は避難した住民のヤオトンを寸借して仮眠をとります。下級兵士は休む間もなく飯盒炊さんにかかりますが、薪にする材料がないので手近

な建具や家具を壊すしか方法がありません。上官や古兵の寝ているオンドルにも火が入り、飯盒めしはうす黄色に炊きあがります。今から考えると溶かした雪には大気中に漂っていた黄塵が含まれていたことになります。

長城の稜線を右に越え左に折れて戦い、不幸にして敵弾をうけた戦友を山岳地帯から連れ帰るのも民家の戸板が担架に使われ、荼毘に付す時には大量の木製品を必要とします。命じられた作業だが戦友を失った寂寥と何ともいえぬ罪悪感が交錯して心が痛みました。住民にとっては迷惑至極で「面不浹」（仕方がない）で片づけられるものではなく、またどうしようにも他に術はありません。朋友西口君は語ります。炊事当番のある日、孔子廟とおぼしき堂宇に入り仕方なく扉に手をかけた時、祀られている本尊と目が合った。その顔の怖さ、うらめしそうな眼差しをいまだに忘れることができない。住民が大切に信仰しているお堂の扉をも灰塵

に帰したということを。

戦争という狂った凶暴な魔物は人間の考える良識を奪い去って現代の冷靜な目からは到底考えられないことが平気でおこなわれるのです。それが戦争というもので二度とこの過ちをくりかえしてはなりません。彼我双方の流した血潮と尊い生命の代償を現在に求めるわけにはいきませんが、せめて住民の生活向上と家財修復にできるだけのことをしてあげたい。大陸的で氣の長い話だが植樹から始めて今は還らざる日々のつぐないの一助になればと念じています。

50 年の昔、青年たちは学校卒業と一緒に青春を奪われ、生命までも国のためにと信じて戦場にむかいました。植樹こそ、不幸にして望郷の念かなわず若い命を失った幾多の戦友の魂に捧げる最高の献花だとたたく信じます。植樹一林一森と育成し環境保護と住民の生活向上に努めるネットワークの趣旨に心より共鳴賛同する辞とします。我々が心ならずも住民に与えた迷惑の後始末を若い世代に肩代わりさせていくようなりませんが、ワーキングツアーリーに参加される方々をはじめ、会員のみなさんの健康と安全を祈念して乱文を止めます。元気で頑張ってください。



### 今1歩の飛躍に力を！ カンパにご協力ください

なにごとも「新しく始めるより、持続するほうが困難だ」といわれますが、緑の地球ネットワークもそのことを実感しつつあるところです。でも、この 2 年半、2 つの海外協力と北海道におけるナショナルトラストの準備、自然と親しむ会などの活動を、順調に前進させることができたのは、たくさんの支持者の協力と幸運に恵まれてのことでした。

ここでいま一歩、前進をかちとるために、ネットワークの財政を強化することが急務になっています。みなさんのひきつづきのご協力をお願いいたします。



### はやくも 2000 枚！ 使用済みテレカ回収に ひきつづきご協力を！

「使用済テレカが苗木 20 本に！」と呼びかけたところ、2 か月たらずで 2 千枚以上が集まりました。連合大阪 1 区協の服部和美さんは、「前から集めていたから……」と千枚以上を届けてくれました。京大農学部・理学部の有志、花園大学人権教育研究室など、大学でのとりくみもはじまりました。田中裕さん、宮本順子さん、山下純子さん、田山啓子さん、中井美和子さん、そのほかのみなさん、ご協力ありがとうございました。手軽にとりくめる協力活動として、これからさらに力をいれますので、よろしくお願ひします。



## 香港・長州島における木を守る運動

深尾葉子 (GEN世話人・大阪外大講師)

'93年8月より半年余り、香港で生活していました。受け入れ先は、香港中文大学で、イギリスが1896年に租借した新界の沙田というところに住んでいました。そこは、かつての田園地帯と、近年急速な勢いで開発されたニュータウンとが交錯しており、また大陸中国との国境も近く、九龍と広州を結ぶ鉄道の沿線でもあります。ところで、この香港では、香港島などイギリスが入ってから開発され、また重点的に植民地経営が行われてきたところには比較的緑が豊かなのに比して、この新界の山々はほとんどがはげ山であるのが印象的です。熱帯に属すこの地域でのはげ山の原因が、土壤的、気候的なものなのか、人為的あるいは歴史的なものなのか（おそらく後者の要因が大きい）一度調べてみたいと思いつつ、半年間の滞在を終えて帰国してしまいました。

ただその間、興味深いニュースに会いましたので、報告をしたいと思います。それは、現在新空港が建設されているランタオ島の隣にある小さな島長州島で、香港政府による道路建設の計画がもちあがり、それによって切り倒されようとしている1本のガジュマロの木を住民が守ろうとして立ち上がったという話題です。この島は人口も数千人で、これまで限られた電気自動車以外は車が走る道もなく、また住民もそれを望んでこなかったのですが、現在香港政府が、島を貫く縦貫道路を

計画し、観光開発しようとするなかで、その道路の開発予定地に立つガジュマロの木が切り倒されることになり、それにたいする反対運動が住民側からおこされたというわけです。問題となつた木はちょうど現在の市街地のまんなかにあり、樹齢数百年、住民の間では“風水木”として親しまれてきました（風水木とは、GENが植林をおこなっている山西省でもよく見られ、お墓や家を守るものとして、大切にされている木）。この街にもかつて同様の木がたくさんあり、すでに家屋の建造などで切り倒されてなくなっているとのこと。今回は、数少ない残された木をめぐって対立が生じ、住民側が抗議行動をとるようになったのです。新聞の報道でそのことを知った我々は、香港中文大学人類学科の学生たちと、1本の木をめぐってどんな対立が生じ、また守ろうとする側は、どんな主張をもって守ろうとしているのかを調べるべく現地に赴き、インタビューをしてみました。その結果、1本の木にさまざまな、歴史的社會的な意味が隠されていることがわかりました。詳しい内容と写真は次回に……。

### 編集後記

くちなしの花も強い日差しにあって、いう間に茶色くなってしまいました。ひんやりしめた空気に漂う甘い香り

## 歌でひろげる♪ 心の輪

子どもの頃くちずさんだ懐かしいしらべを、思い出してみませんか。「日本童謡の会近畿本部」が中国山西省・黄土高原の植林にチャリティー、としてふれあいコンサートを開きます。

●日時 8月20日（土）

開場午後1時、開演午後1時30分

●場所 中之島公会堂

地下鉄・バス「淀屋橋」下車

●会費 大人（15歳以上）1,000円

小人（3～14歳）500円

\*GEN事務所にチケットを用意しています。ご希望の方はご連絡ください。

### 新デザインお目見え

日本ビジネススクール専門学校の協力で～

ジャーン！封筒が新しくなりました。作品展でのチャリティー販売やパネル展示でお世話になっている日本ビジネススクール専門学校デザイン学科の学生たちが競作してくれました。この封筒（角6形）は浜田拓哉さんの作品です。ありがとうございました。募金箱用のシールのデザインもいただいているので、お楽しみに！（完成までもうすこし時間をください……）

を傘の下で味わうのが梅雨時の楽しみのひとつだったのに、これから梅雨ではそれもかないません。さかさててる坊主をつるそうかな…

（東川）

